



ハパオ村の植林活動

清水 展 (しみず ひろむ)

京都大学東南アジア研究所教授

棚田と原木木を守るため

一九九七年の夏からだから、もう丸一〇年になる。毎年の春休みか夏休みに、フィリピン・ルソン島北部山地イフガオ州のハパオ村を訪れて二、三週間の調査を続けている。その理由は村で、ロベス・ナウヤックさんが中心となつて進める植林運動がすぐく面白いからだ。初めは彼が言い出しつべとなつて手弁当で始め、親戚友人たちを巻き込み、村人を説得し、運動が大きくなっていった。やがてIKGSという日本のNPO団体と連携協力して、イオン環境財団や環境事業団、JICAなどから資金援助を受け、村の周囲に総計で約三〇万本の苗木を植えてきた。日本からの援助額の総額は五〇〇万円ほどになる。

ロベスさんは、青年期にハパオ村から移住したバギオ市にて、木彫りの製作・販売・仲買で小さな成功をおさめた。四人の子どもたちが結婚して独立したのを機に、一九九六年にハパオ村に戻り、植林活動に専念し始めた。ハパオ村は、一九九五年にユネスコの世界遺産として登録されたイフガオの四カ所の棚田群のひとつで、観光土産の木彫り製作の中心的な村として有名である。四〇〇世帯のうち半分ほどの家で木彫りをしている。ロベスさんの植林の目的は、先祖伝来の棚田を土砂崩れなどから守るとともに木彫りの原木木を確保するためという。

「くもの巣」とよばれる棚田と
山下將軍がとつたアシンの谷(2003年3月)



植林サイトでJICAの視察団に説明する
ナウヤック氏(2005年8月)

グローバルの理由

日本との関係でいえば、ハパオ村の一带は、第二次世界大戦の末期に、比島方面軍総司令官の山下季文將軍が、主力部隊を率いてたてこもつた地区である。中央から遠く離れた深い山奥だからこそ、日本軍が最後に逃げ込んだのだ。けれども、今では逆にこの一〇年で、村から一〇〇人以上が海外へ

出稼ぎに出ている。多くは香港やシンガポールでお手伝いとして働く女性だ。彼女たちの送金で家が新築改築されたり、弟妹が大学に行ったり、豚を買って伝統的な儀礼を活発におこなったりしている。

ロベスさんは、植林を進める住民団体を、イフガオ・グローバル森林都市運動と名づけた。この団体は村のなかで「グローバル」とよばれている。グローバルと名づけた理由は、ハパオ村は第二次世界大戦の日本最終決戦の舞台となるはずだったが、森の靈氣に荒ぶる心をなだめられた山下將軍が降服を決意した、それで戦争が終わり世界の平和がこの地に「降誕」したからだ、という。一方、日本軍が畑の作物をすべて奪って飢餓をもたらし、山中の避難生活で伝染病が流行つたために多くの村人が命を落とした。

そうした過去を忘れずにいてほしい、そしてこの村の子どもの未来のために、お前もこの植林運動に手を貸してほしいと強く頼まれた。それで噴火後のピナトウボ山で植林活動をしていたIKGSをお願いし、イフガオでもプロジェクトを始めてもらった次第である。一〇年を振り返って、一定の距離を保ち客観的な参与観察を心がける人類学者というよりも、運動にコミットする同伴レポーターとなった感がある。同時に、辺境から、あるいは草の根からのグローバルイニシアティブを考えるための、いろいろな刺激を受けている。